

## 折杉神社とかゆ占（市島町）

吹雪（ふぶき）のなかを、獲もの（えもの）をもとめて、徳尾谷（とくおだに）（市島町前山（さきやま））へ入ってきた狩人（かりうど）がありました。

つれてきた犬が、しきりにほえたてるので、行ってみますと、山すその谷川の近くに、一か所だけまったく雪のつもっていないところがありました。狩人は、ふしぎに思い、急に、からだじゅうに寒け（さむけ）をおぼえました。犬も、ほえたてるだけで、先へ行こうとしません。

狩人（かりうど）は、犬をひいて、岡本村（おかもとむら）（市島町吉見）の家へ帰ることにしました。家につくと、間もなく、旅姿（たびすがた）の僧（そう）が戸口に立って、しばらく休ませてもらえないだろうか、とたのみました。



狩人（かりうど）は、いろいろばたで、徳尾（とくお）の山すそで見たふしぎな場所のことを、僧に話しました。

「そこだ、私をそこへ案内（あんない）してくれませんか。」僧（そう）は、立ちあがりました。狩人は、正じき者（ただしきもの）でした。

「私はつかれています。犬ではいけないでしょうか。犬がさいしょに見つけたのですから。」

「それでは、犬をおかりしましょう。」犬の案内（あんない）で、雪のつもっていない場所についた僧は、里人（さとびと）をその山すそにあつめ、一本の杉の枝を折って、草のなかに立てました。

「ここは、神さまのおわす地にちがひありません。この杉の枝が、枯れず（かれず）に芽（め）をふきましたら、みなさんで、ここに社（やしろ）をたててください。」

そう言い残して、旅の僧は、どこともなく去っていきました。

春が来ました。杉の枝は、苗木（なえき）のように新しい芽をのばしはじめました。里人たちは、旅の僧の言ったとおり、そこに社（やしろ）をたてました。

こういういい伝えのある神社—折杉（おりすぎ）神社では、まい年、神（かみ）さんの正月の日（陰曆（いんれき）の一月一日）に、ふたつの占い（うらない）が、村人たちの手によっておこなわれます。

そのひとつは、かゆ占（かゆうら）です。

境内（けいだい）のひとすみに、しめなわをまわし、中に大きなごとくをおいて、なべをすえます。なべの中には、白米三合と水と、十三本のしの竹がはいっています。しの竹には、一から十三までの刻みめ（きざみめ）がつけてあります。一は、わせの稲、二は、なかての稲、三は、おくての稲、四は、大麦…と、小麦、大豆、小豆、そば、あわ、綿、春のまゆ、夏のまゆ、秋のまゆ、以上の十三が、刻みめであらわしてあるのです。このしの竹といっしょにかゆをたいて、たきあがると、なべをおろし、しの竹を一本ずつとり出します。

しの竹の中へはいっているかゆの量（りょう）の、多いすくないで、村人たちは、その年の作もつ、取（と）りか（か）く（しゅうかく）のよしあしを占うのです。

「一の竹には、ちょっとだけしかおかゆが入ららん。今年は、わせの稲はできがよいな。」

「二の竹は、空っぽ（からっぽ）じゃ。そんなら、今年はなかての稲をつくるのはやめとこ。」

「三の竹は、いっぱい入るとる。今年は、おくての稲がよいぞ。」

もうひとつは、天候（てんこう）の占い（うらない）です。

かしの木で、三センチメートルぐらいの大ききの駒（こま）が、十二こ、こしらえてあります。かゆ占（かゆうら）のごとくの下から、おきを引き出して、この十二この駒（こま）を、おきの上にならべておきます。駒（こま）が、青い煙をあげて、ちよろちよろと燃え（もえ）はじめると、一から十二までの番号（ばんごう）が書いてある板の前に、ひとつずつ、そおとと並べ（ならべ）ます。

燃えて（もえて）しまった駒（こま）の、灰（はい）の色の白い黒いで、月ごとの天候（てんこう）を占う（うらなう）のです。

「一の前の駒は、えろう灰が黒いなあ。一月は、ぎょうさん雪がふるらしいぞ。」

「五の前ののは、まっ黒じゃ。ことしの五月は、おかげさんで、水の心配はせんてよいらしいなあ。」

「八の前ののは、白いなあ。これじゃ、ことしの八月は、ひでりかの。」

社殿（しゃでん）のうしろにある小塚（こづか）が、旅の僧（そう）をこの地へ案内（あんない）した犬をほうむったところだと伝えられ、村人たちは、そこをいんのどう、とよんでいます。

